

**日本学術会議若手アカデミー
公開ワークショップ
「日韓交流から科学の社会的・国際的貢献を考える」
2018年3月28日
(休暇村 志賀島、金印の間)**

- プログラム -

- | | |
|--------------------|--|
| 14:00 | 挨拶 岸村顕広 委員（24期若手アカデミー・代表） |
| 14:10-14:40 | 発表1 狩野光伸 委員（23期若手アカデミー・副代表） |
| 14:40-15:10 | 発表2 Prof. Yong Ho Park（韓国若手アカデミー(Y-KAST)・代表）
“Introduction of Y-KAST” |
| 15:10-15:40 | 発表3 Prof. Yong Ho Park
話題提供 “Vision and Challenges for Young Academies” |
| 15:40-16:10 | 発表4 新福洋子 委員（24期若手アカデミー・副代表、国際分科会委員長） |
| 16:10-16:30 | 休憩/集合写真撮影 |
| 16:30-18:00 | グループワーク/研究交流
小グループ内での自己紹介/研究交流と、特定テーマに関する議論 |

参加者数：28名 [内、若手アカデミー26名（うちskype参加1名）、
外部参加者2名（ご当地参加1名、韓国から招聘1名）]

概要：

開会の挨拶として岸村委員から福岡の位置づけの意義の説明や、今回のワークショップの開催趣旨の説明などがあった後、ワークショップの前半として講演会が行われた。狩野委員からはアカデミーの存在意義、若手アカデミーの役割について、これまでの経験を通じての問題提起と考察がなされ、参加者と活発な議論が行われた。次に、韓国若手アカデミー（Y-KAST）からのゲストとして招聘したPark先生からは、Y-KASTの紹介と活動報告と、若手アカデミー活動を通じた若手研究者への期待などが語られ、参加者と積極的な意見交換が行われた。新福委員からはWorld Science Forum 2017の参加体験を中心として国際的活動、特に、policy makerとの関わりやscience diplomacyの重要性が指摘され、次のround table discussionにつながる議論がなされた。

ワークショップ後半は、参加者5-6名を1グループとして5つのグループに分かれ、round table discussionを行った。各グループでは自己紹介を交えた放談ののち、日本発の独創的な科学のあり方や、アジアでの科学の発展のために必要なことに関する議論が行われた。

「科学者が政治家に積極的になっても良いのでは？ Policy makerとのオープンなコミュニケーションが必要。また、研究評価の仕組みを柔軟なものにし、社会課題への貢献などの軸での評価も行い、若手を育てるべき。」、「アジアでは細分化したdiscipline間のつながりが弱い傾向にある。点を線でつなぐことのできるマネージャーを育てるべき。そのような目的には若手アカデミーが負える役割があるはず。」「自然科学と人文・社会科学で、東洋・西洋の違いの出方が異なるので一般化は難しい。一方で、日本人が大きなパースペクティブで物事を見つめるのが得意でないことは確かなので、補う必要はあろう。」「欧米は、比較的、社会における研究の認知度が高いのに対し、日本は大学進学率もそれほど低くなく（とはいえOECD各国平均より低い）、domesticに教育・研究が行われている割りに研究に対する理解が得られにくい。日本では宗教の影響が出にくく、公平に情報伝達がされやすい可能性はあるが、リテラシーに限界があるという弱点がありそう。」「東洋は、西洋と異なり温暖多雨気候で造山帯に位置するため、古来より天災に対抗するために集団営農・地域保全共同（水田稲作）が発達し、これはアジア的思考法と欧米的思考法の違いの一因となっている。日本は、伝統技術から世界最先端技術まで、多彩な社会基盤技術があり、自己の近代化の成功と失敗を踏まえて、西欧文明と異質の文明を持つ諸国、特にアジア途上国に、馴染みやすい技術を開発・移転する可能性をもった国である。これらの強みを生かして、多くの分野にまたがるNew disciplinaryな新領域研究分野を展開できるのではないか？」など、国際的な文脈から科学のあり方を問う熱い議論がかわされた。

開会の挨拶をする岸村代表



講演風景 (Park先生のご講演)



Park先生への記念品贈呈



講演する新福副代表



講演する狩野委員



グループに分かれて行ったround table discussionの様子。



参加者の集合写真
(最前列右から3番めがPark先生)

